

東北電力中学生作文コンクール 優秀賞受賞作品紹介

東北電力(株)が募集した中学生作文コンクールに629校から、延べ23,374編の応募作品がありました。その中から、角館中学校3年生・今村令さんと、桧木内中学校2年生・斎藤ひさ子さんの作文が、秋田県代表優秀作品(15編)に選ばれ、昨年の12月3日に秋田市で表彰されました。

優秀作品に選ばれました、今村さんの作文を紹介します。斎藤さんの作文は1月号で紹介しています。

私が私であるために —「個性」を大切に—



角館中学校 3年 今村 令

私は今、身長が148センチです。中学校三年生の同級生の女子の中ではかなり低いので、私は、昔から背が低いことがすごくコンプレックスでした。それだからかわれることなんて日常茶飯事だったし、言い返せない自分がすごく嫌いでした。その頃の私にとっては、このことは自分にとって大きな悩みでした。でもある時、ふと「それも個性なんじゃないか」と思ったのです。そうしたら、一気に気持ちが軽くなりました。すると今度は逆に、背が低いからこそ、出来ることも見つけられるような気がしました。

私が私であるために大切にしたいもの、それは「個性」です。個性は、誰もが持っているものであって、一人一人違います。そして個性は、自分の性格や考え方、才能につながるものだと思います。しかし、「みんなと同じように」していれば、個性は育ちません。大事なものは、「まわりの目」ではなく、「自分の目」です。私は、個性は見方一つでいくらでも素晴らしいものに変えられるものだと思います。なぜなら、個性を自分のプラスにしている人は、とても輝いて見えるからです。私は以前、「みんなと同じように」ということがありました。自分が思ったことも言えず、いつも我慢して、一人で自分の中に溜め込んでいました。でもあるとき、自分は自分でいいんだ、と思えました。そのことに気付いてから周囲を見てみると、個性を出している人はみんな自分に自信を持ち、キラキラ輝いて見えました。

自分と全く同じ人なんていないわけがありません。意見が食い違ったりして、それで相手を拒絶してしまえば、そこで終わってしまいます。そうなった時、お互いに歩み寄りなければいけないと思います。お互いの個性を認め合い、理解し合ってこそ、そこでその人の良さが発揮できるのだと思います。このことは、学校でも、社会でも、また国際社会でも同じことなのではないでしょうか。たくさんの方に縛られているこんな時代だからこそ、一人一人の個性を尊重すべきだと思います。

もう一つ、今の「私」を支えてくれているものがあります。個性を出しながらも、時々迷ったり不安になったりする自分を、常にそばで見守り、応援してくれている存在です。その存在は、私の友達と家族です。

私は、友達というものは生きていくうえで必要不可欠なものだと思っています。友達がいなかったら、今の私はここにはいなかったと言っても、過言ではありません。嬉しい時も悲しい時も、いつも隣にいてくれました。昔、私にとってすごく悲しいことがあった時、その友達は私が元気になるまでずっと一緒にいてくれて、私を励ましてくれました。私も、自然と笑顔になれました。その友達と一緒にいると、肩の力が抜けて、素の自分を出せます。だから、その子が困っている時には、絶対にそばにいてあげたいし、頼ってもらいたいです。お互いにそう思い合えることは、とても幸せなことだし、それこそが「本当の友達」なのだと思います。だから私は「その場だけの友達」は、絶対に嫌です。ただ一緒にいるだけだったり、簡単に裏切ったり傷付けたりできるのは、本当の友達とは言えません。私はそんなふうにして人と付き合いたくはないです。だから私は、大事な友達をいつまでも大切にしていきたいです。

そして、もう一つ私を支えてくれる存在である家族は、どんな人たちよりも長い付き合いです。私の良い所も悪い所も含めて、色々な面を知っています。だから、一番ケンカもしてきました。でもその度にお互いの理解が深まり、今は私をここまで育ててくれたことに、心から感謝しています。私は一人っ子で、今まで兄弟ゲンカをしたことがありません。ですから、親とぶつかりあうことは人一倍多いです。でもよく考えてみると、私が今ここにいられるのは全て親のおかげなので、これからは親に感謝して、大切にしていこうと思います。そしてそれが、今の私に出来る一番の親孝行です。

私は今、十四歳です。今の自分も、そしてこれからの自分も、「好き」と言える人生を送っていきたく思います。そのためにも、個性を大切に、そして私を支えてくれる人たちを大切にしていきたいです。私にとって、個性を捨てるということは、私が私でなくなることに同じです。だから私は、自分や相手の個性をちゃんと理解して、向き合って、その上で、人に流されずに、まっすぐに前をむいて歩いていきたいです。そして、いつもキラキラ輝いている人になりたいです。